

往後之原集

利
2903



明
利
2.9.13
倉



由縁齋

りーたれ

楷の入道

いーや

願やといひ

いーの

社

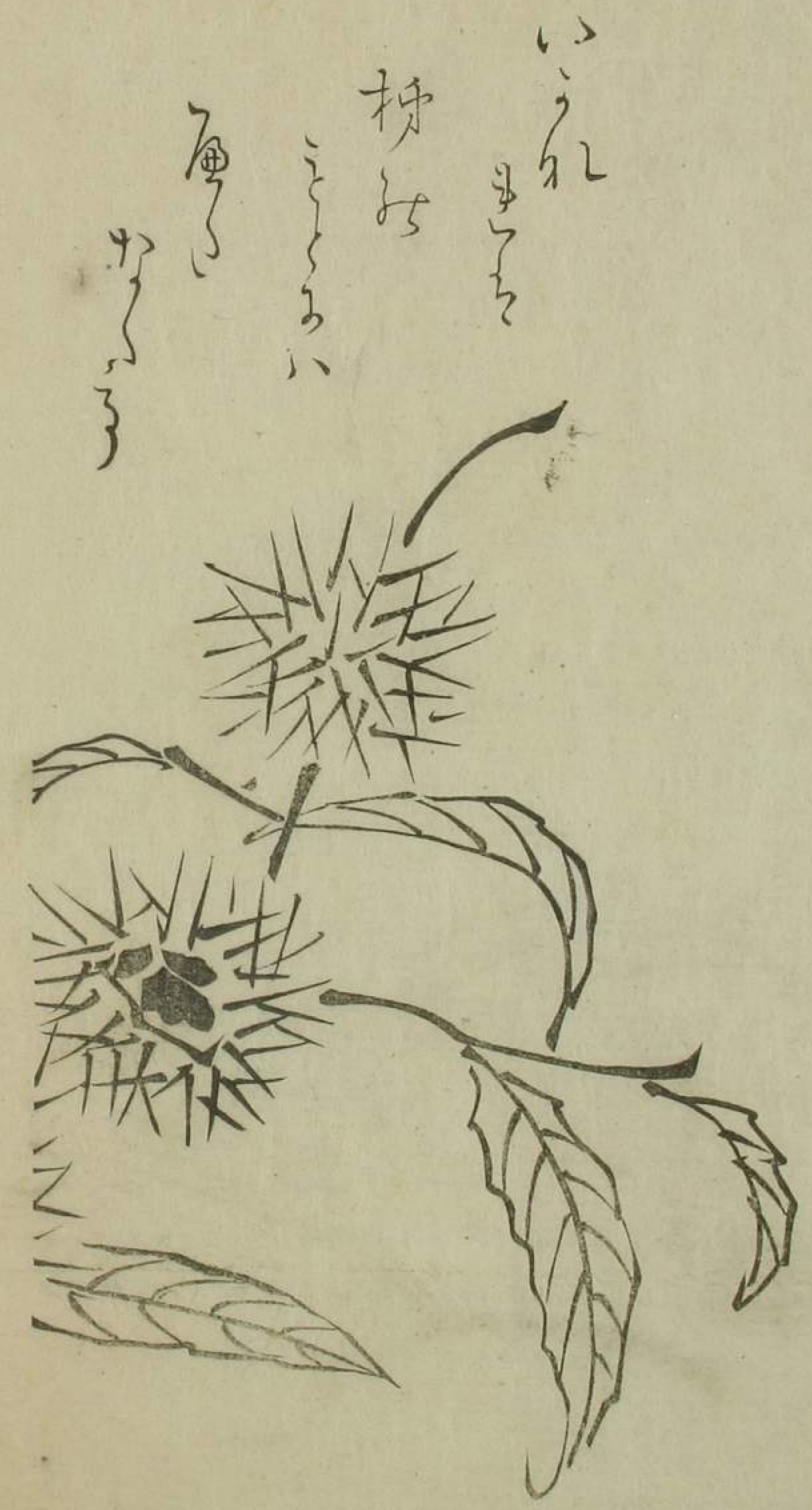


長尾宮



おかしき花よりえいのいづらの
 中きふこ子いづら子なるらん

新果亭
 有栗



栗の
 信ふふい

條栗
 栗標



文ふふふふふ
 新雲
 栗標

桂栗亭 新雲

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

寒

天地根

袖のあはれは出づるの風の吹くはるかに
雪

古果の里院

中山の山は
中山 猛風

新果の如石
まき香

佐原の松は
柳 天竺之

花のまはるかに
原 清風

枝をまげ
綾帯の百丈

青柳の葉は
暁柳 散釋の煙飛

水葉の如く
白雲板 獨碎の石鏡

水葉の如く
牛 内 百年

柳の如く
柳乃

柳藏舟

原

有鳳

江一ふんえのいん人隅田川柳のかけやうやうや

醫家柳

前山如石

典の巻よたましく柳のいんてし風のもは脈

修造場柳

柱舟

柱よすくのいまきま柳のいんてし

柳下品玉

習が薬門
肥果も好山

青柳のあうりかけ下教人目うくれま玉けま

猫毒糸

岩井柱教

昔疾のあうりかけ馬福ふんての病いよまきま

天共之

鏡みうけりうかかたてらまきま柳のいんてし

几中

寺井梅風

くまいんてし柳のいんてし

彼岸會

柱舟

川いんてし柳のいんてし

暮浪子溪堂

さきひね風なちうり柳のいんてし

初堂
辻

行雲

中りふんてし柳のいんてし

送日さき風

~~~~~

吹松さ峰風

~~~~~

山田呉る

~~~~~

金山

~~~~~

方程

~~~~~

春風

まら暁

桂煙

胡麻さしとささう馬さうまじむ山本さむむまねらけゆわ

杏果さう桂屋

~~~~~

梅井 煙花

~~~~~

志幸

~~~~~

松煙

~~~~~

〇世









つれづれとつれづれの中よるを

桂雄

も風のよるせし後一と云はれぬ

幼女  
れ

ちりちりちりちり梅はらりしけふえは

大堰川はあまのこゝろのむら

いふをいふとあやうき 楊果 和梅

雪の中は月ふらふらと花はらりしけふえは

落む埋辨書 笠原 栗標

是も又けふの夜は梅を揚ちしけふえは

古く集りてはむらとあやうきあやうき月の

ささげのうらなひは 辻 青雲

ひらひらとあやうきあやうきあやうきあやうき

遅日 桂雄

まきのりけふはみかたのけふは

空鳳

くはらりとあやうきあやうきあやうきあやうき

遅り續書 井上 玄風

やうやうとあやうきあやうきあやうきあやうき

ほり福み 関 桂屋

なとすく濁りあやうきあやうきあやうきあやうき

遠く旅人

植舟

あはれなる旅人よ 旅のついでに 舟にのりて 遠くへ

舟のついでに 遠くへ

植桑

あはれなる旅人よ 旅のついでに 舟にのりて 遠くへ

塘陽巻

山口 美蝶

あはれなる旅人よ 旅のついでに 舟にのりて 遠くへ

野遊

古風

あはれなる旅人よ 旅のついでに 舟にのりて 遠くへ

溪雲

あはれなる旅人よ 旅のついでに 舟にのりて 遠くへ

民女

あはれなる旅人よ 旅のついでに 舟にのりて 遠くへ

山田 権心

あはれなる旅人よ 旅のついでに 舟にのりて 遠くへ

野遊到夕

方雅

あはれなる旅人よ 旅のついでに 舟にのりて 遠くへ

去野

あはれなる旅人よ 旅のついでに 舟にのりて 遠くへ

董

桂歌

あはれなる旅人よ 旅のついでに 舟にのりて 遠くへ

三月三日

金山

信のにせゆ干のそわはくはけくまかりる流の芳すれ

と離

笠原標山

平中つれまはさつた離るハ獲るこもそそ成るまは

田家園翁

井上和風

ま作のせまあを来よりふ姓の門田りけら見く鶴也

ゆ干

安井 桂眉

はう厚めの志たるこもなるは流路を見さくもやとれ海を

孝聖

尻まきけ流るうらるは人を酔ひやうにみくははつ

拾取

懐古より英風

新まつかつりまよ通るおきりいばいんんぬり

曲の宴

越前編 伯之

あつちの流路まよまきこ離る由の歎もらうこむ極のそり

出替

大野 龜遊

まよるれいれい終の事ははか事まよりつりよ子やまかかこん

雨巾出替

冬果よりま陶

あつちのりりこまよとんこりこり下結牽くわらぬ如き

柀花

桂 梁

おまのりこまよちかちりこりこりこりこりこりこりこり

李茶

挂旗

木の葉のよみかきしるしに  
かきしるしにまじりて  
かきしるしに照らす  
かきしるしに

苗代

苗代

木の葉のよみかきしるしに  
かきしるしにまじりて  
かきしるしに照らす  
かきしるしに

けしね供紙

方雅

いろはのよみかきしるしに  
かきしるしにまじりて  
かきしるしに照らす  
かきしるしに

姓

玉年

いろはのよみかきしるしに  
かきしるしにまじりて  
かきしるしに照らす  
かきしるしに

山次

方雅

橋のうらみかきしるしに  
かきしるしにまじりて  
かきしるしに照らす  
かきしるしに

小西 挂槽

いろはのよみかきしるしに  
かきしるしにまじりて  
かきしるしに照らす  
かきしるしに

天竺之

いろはのよみかきしるしに  
かきしるしにまじりて  
かきしるしに照らす  
かきしるしに

字名 款冬

けしね  
けしね

いろはのよみかきしるしに  
かきしるしにまじりて  
かきしるしに照らす  
かきしるしに

杜 若

玉年

いろはのよみかきしるしに  
かきしるしにまじりて  
かきしるしに照らす  
かきしるしに

鳥 双

鳥 双

いろはのよみかきしるしに  
かきしるしにまじりて  
かきしるしに照らす  
かきしるしに



丹州無山  
田有久

佐は妖のまれの衣ぬきく肌へとくはあつとまきよる  
空鼓夏末

はいふのあまふりりわゆるに隣まてくまきよる人  
更衣

ねこかきあをさくふはまのまにわらうとくは神心  
加ぬ金以  
小杉 桂まふ

るんこまうむいとほくまは端あうかひくはあつたぬく  
灌佛 桂舟

釋そみ誕生のくは端もまきよる実よ後うく出ふは念佛

ねはきり丸の鬼丸れー実ほ佛のまきよる  
紙雄

ぬきこくーうれ袖まのやまきよる出くはあつたぬく  
卯忠 桂朵

まのまきよるーはまきよるまきよるまきよる  
章喜の卯忠 島山

はまきよるーはまきよるまきよるまきよる  
山新樹 笠松 煙雪

はまきよるーはまきよるまきよるまきよる  
中庭新樹 栗標

はまきよるーはまきよるまきよるまきよる

新中

桂舟

あふもとまの 雀やまをさうらんまげのけりたる舟よまを  
新中 碍石

新 桂

席よりも是くはまの月を痛のちやわらうもくとく生生の舟  
寺 餘花

桂 芽

入おふまをよりいーいまにーはまをわらうのまをた  
耶 々

天 地 根

月よりわらぬり焼けまをさうらんまげのけりたる舟よまを  
方 雅

方 雅

まのちいこれ中のまをわらうのまをわらうのまをわらうのまを  
桂 葉

桂 葉

いさよはねまをさうらんまげのけりたる舟よまをわらうのまを  
桂 葉

桂 葉

何もまをさうらんまげのけりたる舟よまをわらうのまを  
百 姓 中 能

桂 葉

子規かきまをさうらんまげのけりたる舟よまをわらうのまを  
福 原 耶 々

桂 葉

おれまをさうらんまげのけりたる舟よまをわらうのまを  
雄 児

雄 児

可島まをさうらんまげのけりたる舟よまをわらうのまを  
越 前 編 井  
耶 果 々 桂 南

耶 果 々 桂 南











いづれもいづれにいつか月の光るよりおぼろしくい

雨後五月

女

こぼけふらふら申す事なれどなまらぬは月

名所五月

五風

まなみのくしんくしん日の子らもなれぬのよ

土用干

標山

桑より此小袖を下女にゆれぬ

山家書干

竹屋羅文

まゝも人なれく山家よりきね

夕立

桂影

もたのの腰ふし

新雪

あまのつゆふたへ

寺院夕立

海上眉集

あまのつゆふたへ

田家夕立

百丈

日やけ

断夕立

青雲

夕立

船中夕立

信風





立秋

桂新

秋さぬと月もさへて移りゆく時さけち枝のまきもさへりて魚

初秋

桂石

ゆめ長き河の流御代よおろりて枝をまきて秋の初風

方雅

清秋とてきわむるもさへりて人の葉山子時りて秋の初風

初秋露

有洞

秋中さへり葉よわくもさへりて秋の初風

初秋梅立

如石

あつちのつむぎさへりて秋の初風

初秋魚棚

井原 浩雪

さうさへりて風の吹枝のまき魚の棚もさへりて秋

残暑

標山

かの九夏三ふくしむるもさへりて秋の初風

七夕

方雅

あつちのつむぎさへりて秋の初風

桂芽

あつちのつむぎさへりて秋の初風

桂芽

あつちのつむぎさへりて秋の初風

奇宅七夕

門女

あまのほろひのうらたに思ひあはれしはらひのほろひの今宵

七夕踊

怪志

子や孫の氣とてたふなく踊るねの産屋の世に娘いへん

魂糸

喜多 英風

は先祖をむくむまじきまじき苦ぶさぬのころも向成ん

漢雪

かた人のええねとつとみえぬのころ一ひの目やうもはゆるも

貧乏魂糸

枝風

玉のまゝすの紫ぬのよほしき人かひまらぬ借銭のころ

山家玉糸

桂旌

きねのねがし鉄炮も揚りやうきなぬさし山家の居

中元

桂菴

又車ねみ月もわやおほくもころころねをこれられ

盆燈

方雅

おちつゝころかり目ももふつとみぬ一茶の後れさう子灯籠

燈籠

桂右

精霊しては火つけもはらまらぬやそぶ身ははり灯籠

踊妓往来

天竺之

いそつゝ道もまじけの大踊まねけ松子にぬけしきもさる



踊場俄雨

去書

ふやうれまきいほほのまきう場へ新道もはなれぬいほる

撰待

桂苑

ふいふは佛のたよいれもふや坊とくまうふぢと撰待茶

相撲

桂影

はくそいこもや飛つてんまきのほもこつていふぢとらまきり

安原 楚石

うけいといつてつる秋のふは離きものねとまきり

萩

桂影

秋まぬと目ええまきも萩の葉はつるまきり

彩雲

まき秋の風まのらるる者つはまきりもねまきの萩系

萩の女らうまのこい

方雅

うけいれ女らまきもねまきとまきの萩のこい

萩

春風

画の馬もりてやうらん萩のまきりいほるまきのかき

女らうま

天地根

まき萩のまきり中まきりいほるまきのこい

春

桂雄

うけいれまきのまきりまきりいほるまきのこい



色づくぬねてふせれいふれいふわあふれくさりのよきまき

雨中虫

とれ中へ解きつゝわらわ村にわらう出さう宿籠ちあうせ

古戦場虫

疾雪

戦のらり〜ゆ〜や〜も〜い〜け〜わ〜ら〜ら〜れ〜

表虫

天地招

子を〜い〜い〜鬼〜鬼の〜れ〜れ〜似〜く〜い〜い〜

修造場瑞穂

標山

ふる清場をふるの〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜

いふあはよきる

空風

雲〜〜お〜お〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

八朔

桂飛

吉原のよ福も田の角なま〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ち風

神國〜〜と〜佛〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

厚

桂新

湯〜〜〜市川芳村い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

風舟の雁

かみ合便  
桂芳

風ふま〜安〜安〜を〜抗〜を〜け〜も〜後〜と〜物〜の〜よ〜な〜つ〜り〜掉〜ふ〜





霧島船

金山

かのくさくさしたつらつらの船きりに島をめぐりゆく舟を何丸

秋風

桂芽

ふくすに江戸燈籠の灯をあらわす秋風

山秋風

秋多福井  
岡田 桂仙

夕風お宿の月やけおん木のみなる秋風山は

野分

桂葉

を吹く秋風はのどけく吹まらぬ秋風の性

桂葉

吹く秋風はよるのかけはるる秋風

秋雨

方鞋

まよふ秋雨はゆるりゆるり秋風

桂葉

洗濯もあつぬりおる来る秋風の性

秋動物

舎屋

鳥の人をつまむ狐も人畜はゆるり秋風

川邊情状

英風

群鳥もゆるりおる秋風の性

三日月

舎屋

三日月の光をゆるりおる秋風の性



路月

空風

詠入る煙るに抄ふ所 ちるちるあはれいふやうにちる月

六寺月

雄雉

よるすくく奥の徳なるしほは露の結ぶる月をさるる古き

古戰場月

桂桑

謀らるる甲冑に落ちぬ月をてぬきしきぬけに

檜上月

吾雲

丸末けして更ほりぬる月をけりしきぬけに

苔上月

糸雪

庭をさるる苔のむらさききぬけに

井邊月

雄雉

高き小池にちる月をさるる月をけりしきぬけに

社内見月

連雲

花あふくいそ風をさるる月をけりしきぬけに

浜人見月

淡雪

罷りくくちる月をさるる月をけりしきぬけに

月前述懐

雄雉

のそんといひし芳かきぬけに月をさるる月をけりしきぬけに

月お魚

栗標

て新月の影白ぬけし海道のかきぬけに



駒迎

桂歌

寂草の古あわむしん入枝のおふまゐるまのぬらうらうら此駒

掛衣

智雄

翠葉こゝろ櫃こゝろかこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさ

彩雲

かこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさ

旌州

月ふり川夜草のなまきこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさ

高宗掛衣

昔風

月ふり川夜草のなまきこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさ

芝風

天穂おろくにんこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさ

秋夕

方雅

勝原附書りこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさ

不織

清きさかきこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさ

智雄

らんこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさ

雄飛

あさけおろくにんこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさこゝろさ

〇

秋雲

淋—はのあつらの泣はき博の博—くつとあまの夕ま

連雲

市中秋夕

西代み—もあまを—もわし—くつとあまの夕ま

羅父

町秋夕

夕暮—くつとあまを—もわし—くつとあまの夕ま

秋旌

古き秋夕

あか柳ふ花をみ葉を—もわし—くつとあまの夕ま

楚石

留る秋夕

秋の信—もわし—くつとあまの夕ま

標山

秋夕秋更

し—もわし—くつとあまの夕ま

栗標

秋夕庚馬

秋風の—もわし—くつとあまの夕ま

秋雲

秋夕宿替

古き—もわし—くつとあまの夕ま

不瑞

鶉

あま風の—もわし—くつとあまの夕ま

辻井 峰風

草狩

秋暮—もわし—くつとあまの夕ま

菊

天地招

あはれに袖をひきかきしきりしは

花文

あはれに袖をひきかきしきりしは

花文

あはれに袖をひきかきしきりしは

花文

あはれに袖をひきかきしきりしは

花文

あはれに袖をひきかきしきりしは

花文

儀家集

峰風

あはれに袖をひきかきしきりしは

栗

花文

あはれに袖をひきかきしきりしは

十三夜

天姥招

あはれに袖をひきかきしきりしは

大刀魚多

栗標

あはれに袖をひきかきしきりしは

秋詠

百丈

あはれに袖をひきかきしきりしは



初冬懐き

栗標

あゝのこゝろをいふに懐きよとてつゝとらやふれ

蟻

桂雄

度々山を程々をいふと戸をつきおちるに涙をかみ難人

炭

羅文

もとのまゝを焼くは炭のあつたのこゝろをいふに懐き

時雨

桂芽

けいふのこゝろをいふに懐きよとてつゝとらやふれ

靉雲

二三丁をいふに懐きよとてつゝとらやふれ

山家時雨

如石

度々山を程々をいふと戸をつきおちるに涙をかみ難人

渡り田子

英風

いふに懐きよとてつゝとらやふれ

海邊時雨

岡本 武雄

かゝるまゝをいふに懐きよとてつゝとらやふれ

葉をいふに

栗標

佛はとらふまゝをいふに懐きよとてつゝとらやふれ

ら後葉

天地和

あゝのこゝろをいふに懐きよとてつゝとらやふれ





水鳥

小松百里

あち野の松サリまうらにかり掃く地獄の釜に煮やらん

氷

雄鶴

細工もてきぬとけう二田のかんき紙はよとる氷

雄州

山里とみうら雲の水は月の中を夏も川も氷と山

氷初結

全風

新田川よく春も氷とけ初うけとみ葉の遠くらん

河氷

雄羽

急も吸くせとて河よとるあはれを氷とみ

地中氷

戦雄

唐澤の氷とけうとてはなまはかたはれぬとらん

氷向凍

桂夕

又おみけのえとらんアとらん向くま乃おか

霰

桂影

まけけしとらんぬあはれとらんかひ音とる

船中霰

標山

むく網をとおる水はれ小舟の上に雲たるとは早船

雲

全風

くもしうらむらとらん雲と雨とらん雪とけと





古錦雪

雪の舞をまじりてうたふるはなほいとめでたき世にさかたけなる里

渡口雪

舟を移くるまじりてうたふるはなほいとめでたき世にさかたけなる里

京雪

紙路のまじりてうたふるはなほいとめでたき世にさかたけなる里

江戸雪

ふかき世の角力のやうに大名のこころもせん江戸はゆま

大坂雪

踏切のまじりてうたふるはなほいとめでたき世にさかたけなる里

新権

天竺之

桂菜

武旗

方雅

市中雪

家々の屋根一列うたふるはなほいとめでたき世にさかたけなる里

初童

新雪

市場雪

材木の市場ふかき世のまじりてうたふるはなほいとめでたき世にさかたけなる里

新雪

工家雪

雪の舞をまじりてうたふるはなほいとめでたき世にさかたけなる里

土井友風

雪中象群

雪の舞をまじりてうたふるはなほいとめでたき世にさかたけなる里

和風

雪埋材木

雪の舞をまじりてうたふるはなほいとめでたき世にさかたけなる里

権者

〇

雪埋着板

古風

着板とぶの雪よりかりけうつらぬ雪もきつらふとこふゆつらぬれり  
街道厭雪

桂歌

とやしくとふもしくも松人をかくそんらめゆらけり  
依雪結ま

雁文

あふりけまのいそふもこのまの思ひくもあはれす

山家雪游

函山

まはれまも人もあつらひのまのけりさつら山に  
権律河不休

葉のうもゆり埋もつてさふはあつらふさあつら山里

妓皴雪游

標山

人あつらはれつらまはれつらつらつらつらつらつら  
標木もあつらひつらつら

連雪

一板とつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
鷹狩

桂歌

大あつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
百年

法もつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
百丈

あつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

岩窟

方雅

石好くふりにはむきく岩窟の類をいふ小野山は

埋火

柱燈

山好く石のやみ後うねもきやくんむのよひ火志の

俳優埋火

如石

火桶をいふ人たえつ歌後うねくあきつて柱をその

神楽

柱歌

火桶をいふ人たえつ歌後うねくあきつて柱をその

法衆

神楽はりく圓のきやくの里田二歩をいふは

佛名

たきけり佛の類はなすもあはれよれむばとく人

佛名到曉

柱燈

釈迦より弥勒かきものことかきあはれむばとく人

鉢きり

柱燈

佛の姿はよき佛はとくきやくれ茶谷をいふ

とくきり坊をいふ

柱歌

たきけりもぬけりやくんむのよひ火志の

寒垢離

栗標

むくやちやく年の儀の行儀とくあはれむばとく人





輕雲

親きよははらわらふ幸のたけらへん

雄飛

未のくま

くまのくまのくまのくまのくまのくま

桂影

歳暮先服

もみ用なきのくまのくまのくまのくま

桂雄

除夜

鬼ももも見はるるおのまのまのまのま

後三粟集上巻終

